土工哀史

――『土工・玉吉』（太平出版社）その後のタコ部屋――

（東京拘置所在監）　駒金哉

本誌では先月号に「労務者の歴史　明治・土方編」をのせた。そこでは、現在も生き続けているタコ部屋が、囚人たちの強制労働として時の明治天チャン政府によってはじめられたことが明らかにされた。引続いてオレたち土方の歴史を考えていきたいが、その場合に朝鮮人問題にふれずにはおれない。人夫出しのかなりを占める彼らは、いつ、どのようにしてのしあがったのか、ということだ。昭和三年頃から勇名・悪名をはせた柳川組の二代目親分・谷川康太郎は「わたしは兎の一見にちがいないがメシ食うため力のかぎり生きてきた。歴史が生んだのだ。ただそれで正当化しようと思わぬが」という。やはり人夫出しが出現し肥えふとりだしたのは、ヤンキーに敗戦してからである。オレたちだって奴らにピンハネされなきゃもう少しキムチが食えるし、食いたいのだ。

「土工・玉吉」十十六日宅下します。私の感想を少し述べて見ます。タコ部屋の発祥の地は北海道である事は少し関心のある人なら知っている事、詳細には何時からとは良く知らないが、はっきりしてきたのは明治あたりからと思う。

私の父なども生きてれば七九才であり二十代には二十年近く渡り歩いたとの事、父は青森生れで、私が生れたので東京に住む事になり、それ迄は下手な博奕を打ってはその「カタ」にタコ部屋を歩いたとの事。それと似て若者も食うや食わずの為の身売りではなく好きで？通っている。一ケ所に根をおろす気になれないと言うより人間の性質というものはどんな環境にあっても絶対に変るものではないと思います。高田さんも生涯を通し（下端）で終らせてしまったのも彼の性質であり人にヤキを入る事のできない故に温床の地を捨て行く事に通ったのです。彼の気持は共に暮した如く解ります。

俗に「若い内の苦労は買ってもしろ」と良く言われます。勤人の仲間でも数あるが「仕事師」には年期がないのです。それ故に仕事師は（鳶、土工をいう）一ケ所にいては腕が良くならないので野町場（大きな組の現場）を仲一本で旅をする。仕事師で一人前と人が認める迄には最低で十年はかかる。何でもこなすには更に十年なので、十五、六から飯場育ちでも三十五前後から一宿一飯の顔見せだけでも世渡りができる。しかし此の様な人は何処でも大切にされるが「助っ人」と言って根無し草で何れは跡もなく消えて行くお祭り屋（その時だけ）で終る。少し苦しさに泣いた者は、もっと上手い世渡りをする。

私は彼の様な生き方を嫌うし若者の通りの飯場においての行動であれば、その態度も特に嫌います。此の陸で死を賭けて彼を慕んだ多くの仲間がいたろう事も想像できます。私は彼に聞きたい。「タコ部屋」は一年中木刀で叩いてる訳ではない。仕事をなまけたり逃げたりを重点にヤキを入るが殺される事なと稀である。週に一度やニ度のヤキよりも毎日の仕事の苦しさである。此の苦しさを生み出すのが高田さんの様に突出した調子者（オヤジの気に入られ様とする奴を「尺取虫」という）の為、一人に対するこまわり（小間割

といって一日のノルマ）は無制限に増されて行く。「昨日高田があれだけできたのだからお前達もできる」と切がない。現在は科学的に割り出して「坪、一人」のノルマが全国で共通している。彼の本に依ると一人でニ坪半とは非人間である（人にあらずで同情はしない）仲間が仲間を苦しめてしまう。自分は認められて後で他より少しは良いあつかいを受るだろうがこの為に以後この部屋ではニ坪半が原則になってしまう、彼は若さも体力もあるから良いが、その後から来た者でそのノルマをこなせない人はどんな苦労をするか彼は考えた事があったのだろうか？　それでも当時の日本は官憲の力は絶対であり裏金で結ばれているとはいえ鬼を通したり又は同業の捉などがうるさいので殺す迄の事にはあまりならなかったが。

実録 土工・玉吉
タコ部屋半生記
（太平出版社）760円
を読もう！

終戦でのしてきた朝鮮人と「タコ部屋」の残虐と

私の知る限りでは「タコ部屋」の残虐が激しかったのは終戦から三、四年ではないかと思う。偽りのない無警察時代であった。

殺す事なんかなんとも思わず腕わたを引き抜いり逃げ廻るのを誰も止める事も出来ずまぜびくびくと動いているのを何処かへ埋めてしまう。あまりの事に警察に逃げ込んだ何人かは、わずか五、六人の朝鮮人の為全員警察官の見てる前で木刀でメッタ打ちにされる。此の無法行為に誰一人として止めに入る警官はいない。これは聞いた話ではない。私が共に逃げたので体験した事です。私達が逃げ込んだ時は二十人以上の警察官はいたが朝鮮人が木刀を振り廻す時には最初から警官は逃げてしまって一人もいない。

日本の歴史に残る重大事ではないか？　終戦の時は逆転して朝鮮人に日本の警察では手

の出せない残虐な権力があった。朝鮮人がなんでこの様に残虐行為に出るかも十四、五の私にも良く解っていた。

私の居た処の川（幅五〇メートル）一ツ離れた人工島に戦時中に朝鮮人収容所があり（その他の外人も少しいた）早い朝や夜遅く風に乗ってアイゴオーアイゴオーの泣き声やヒィーヒィーヒ悲鳴が毎日流れて来る。私達は飛行場の近くの工場に機械の油差しの勤労作業を毎日軍からの迎えの車で運れて行かれたがまだ十二才で組でも二、三番のちびの私は機械に油を差す事が届かないので雑用をさせられ、職人のお茶を沸したりして適当にサボッている時に彼方の有刺鉄線の収容所から二百人近い大男の朝鮮人が木刀を持った憲兵にブチノメサレながら引率されて来る。

彼等の仕事は土工などのやさしい仕事ではない。牛馬のかわりなのだから言語に絶する。昼めしにカンパンが五十粒程のを一袋私達の工場で湯を沸したのを茶の葉の入れないのを彼等の処へバケツで担いで届けると憲兵が手を決ってしまい、それを「奴等に持って行け」という。私達は知らないから黙って持って行くと腕章をした朝鮮の人がその湯を皆に飲ませている。真黒な木の柄杓では汚いのも解らないが何メートルも離れていない処で憲兵が手を決ったのを皆んなは知っている。私達はそいからバケツを置いて逃げて来たが、後から腕章をしたのが憲兵と一緒にバケツを返しに来て「シンパイナイブス」と言って行ったが憲兵達には顔が立ってならなかった。三月位してから朴という班長と話す様になり、昼食のカンパンの中に何粒かの豆形のコンペイトウが入っているのを紙にくんで私にくれた事がある。工場に無限にあるウエス（ボロ切れ）を欲しがるので毎日きれいなのを選んではバケツを運んだ時に五、六枚ずつわざと捨てて帰ると彼が拾って持帰る訳だが憲兵も別に何も言わない。それは衣服のツヤ当に使用するしナクラレル処の裏に当て少しでも木

刀の痛さを少なくすると聞いた。ナグラレル事は避る事はできないし、二十名で一班の連帯責任なので無事故はあり得ない為、尻などは毎日でありもう痛くもないとの事。信じてはいなかったが風に乗って流れて来る声は毎日であった。

彼らはたまりたまった恨みを爆発させた

そんな恨みが終戦と同時に爆発して朝鮮産業団なるものが出来て日本全国で暴れ廻り、日本のヤクザもテキヤも無差別に反抗するものは堂々と殺され、日本の警察は一指も抵抗できず、二十四、五年にアメリカのマッカアサーの手にて一段落したのが現実である。

そんな訳で全国の「タコ部屋」はアメリカの援助で日帝は何とか治めたが、そのまま（〜と残っていた飯場はその頭のカスリ（モウケ）は朝鮮人に握られておりその恨のかからない組織は徹底的に叩きつぶされた。丸

組道は極東組に一手に押えられた。一年足らずで全滅といっても過言ではない。ゴミの組織は陰には少しはあったろうがまな処は全てといって良い。

この組の幹はテキヤであるが、当時の日本は敗戦国であり米は当然「いも」すら買う事もたる事も出来ないが、朝鮮人は何でも自由であり日本よりクラスが一段上であり警察など調べる処か彼等が来れば文句のオマワリ迄逃ていなくなる。（部隊）警察という処は弱い者には恐しく強くなる。たった一人の朝鮮人があちらこちらしているだけで手入がない。

こんな状態にあった朝鮮部下の飯場なのだから想像が付くと思います？　そんな飯場へダメな人の案内でドブロク代位で置いて行かれた私はまだ十三才ですよ。体もできてない私など木刀でこ、三発頂けばあの世行きなのでメッタ打ちに会った事はない。又私の名前が朝鮮人の様なニューアンスがあるので（酒も呑めないガキさもあった為もある）いくら

かは手かげんをしてくれたが、警察に逃げた時は二日間意識不明状態にあり、その後二十日位は何の治療もせず最初に顔の切れた所を三ケ所縫って寝ったままで来は仲間に扱いて貰い、一ケ月後には隧道に皆と一緒に行き二人が自殺した事も、一人不明になった事も後で知った。其の私を逃がそうとして消された人もいた。

その内警察も町の地判にアメリカ軍のMPがトラック三台で来て朝鮮人は皆んな連行され全部解放されたが、その中の数人は北海道の豊平川の砂利採集に連れて行かれたが二ケ月で逃げて一緒に来た人と厚木の飯場に入りその後は同様している処を誰から聞いたのか父が尋ねて来て家を援助しろとの事で一時町家に帰った。その後は会社に入ったりもしたが二十五年のアカ狩りに事よせて徴入りとなり父は死んだのでまたも仕事師という事でホンコツになってしまい、おそまつですが高田さんの事が良く解るのもやはりタコ部屋の其の後を知っているのでは述べて見ました。

彼こそはたしかにタコであるが又明い者をいじめる事ができないために次々と温床の場を気前良く捨て行きますが共感できる一部は明い人の為に体を張ってという事だが実は悪い奴を許いて歩いていたという事です、しかし私が反対に偏屈なのかも知れません。本に成って出版されるし共感者も多い事を思えば彼を云々するよりまず私が至らない事と思いますがどうですか？　彼の気っぷはすきです。唯彼の様に各地に引張タコのタコが互いに出合い丁場（知合い兄弟方などがたまたま一ツ現場でかち合う事）になると眼を見せようと夜も寝ずに早くきれいにまとめる、そしてオヤジから認められ次に出るが残ったタコのみじめな事、言語に絶する。こんな飯場を私も数々と知っている。今の飯場は警察の手は触てないし、何の証明もいらない、殺人などは現在の方が多いのではないかと思う。

これは、山谷救援会が出している『マグマ』という雑誌の才九号（今年の四月発行）から承諾を得て転載したものだ。まえがきに書いたように「朝鮮人人夫出しはいつどのようにしてのしあがったのか」を中心に《土方の歴史》について知っていること、見聞きしたことをきかせて下さい。書いて下さい。近く「無縁仏特集」とともに特集したいのでー。実際に汗水流して働いている者が実際に見聞きしたこと、これを出発にしてはじめてオレたちの歴史がわかると思うのだ。同じ東アジアの民族をいがみあわせたのは果してヤンキーのしわざか？？？　次号から次々号かの「人夫出し発生史」に御期待を!!

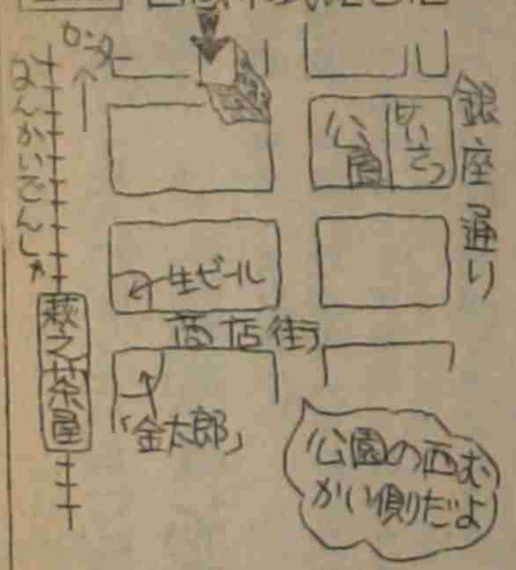
労務者渡世——

愛読者のつどい

——に参加しよう

とき　7月18日(金)夕6ヒ半

ところ　西成市民館3階



雑誌にたいする注文・文句そのほか何でも。腹わって話合って見よう！酒持込み・差入れ大歓迎。（今月号のできばえに対する批評会もやりたいので持って来て下さい。投稿も歓迎）　=入場無料=